

Vol.26

2015
Autumn
エキシューマー

EKISUMER[®]
駅から、消費と社会を考える

特集

ワーキングマザーと駅

エキナカや駅のファッションビルなどで

ショッピングを楽しむ消費者たち。

駅消費研究センターは、

そんな人たちを“エキシューマー”と名付け、

さまざまな視点から研究しています。

【発行】

jeki

駅消費研究センター

【発行責任者】金森 誠
(株式会社ジェイアール東日本企画 取締役企画制作本部長)

【編集責任者】加藤 肇
(株式会社ジェイアール東日本企画 駅消費研究センター長)

【編集委員】深井基弘 中里栄悠 安川由紀 松本阿礼

【お問い合わせ】03・5447・0991

【URL】<http://www.jeki.co.jp/ekishoken/>

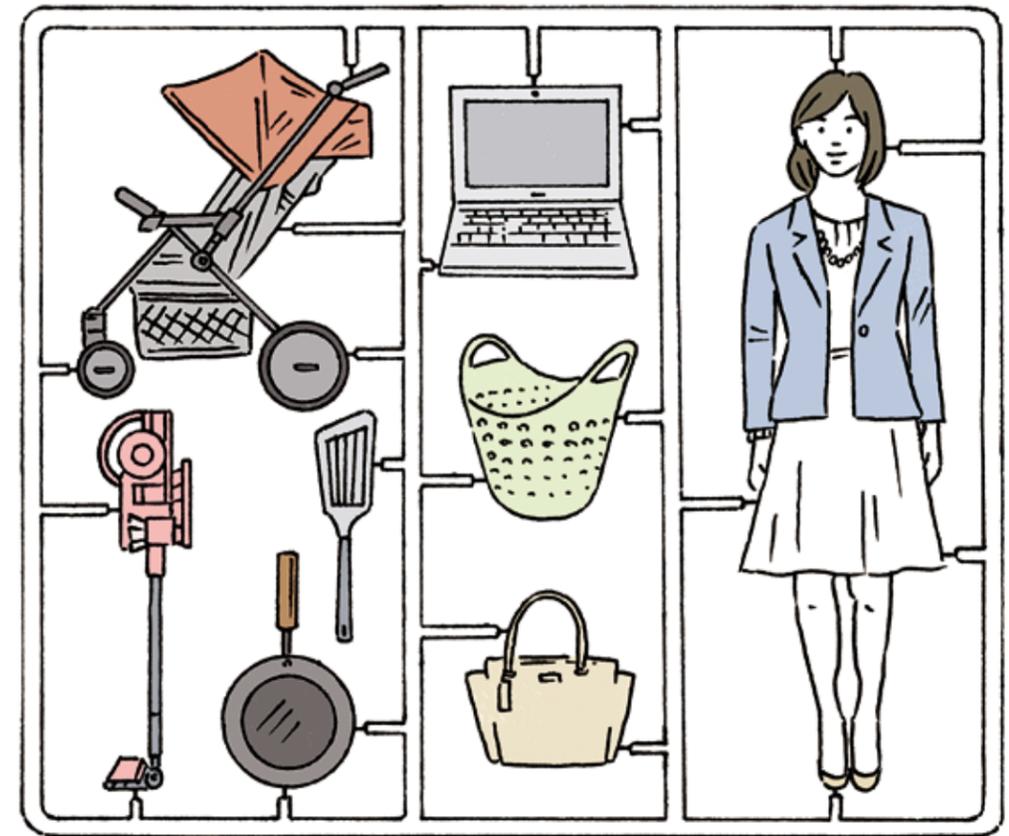
【制作】

プロジェクトディレクター
坂野泰士(有限会社シンプル研究所)

編集
小林英明 須田佳織 佐藤勇人(株式会社レマン)

デザイン
和田展明 高橋紗希(株式会社レマン)

印刷
株式会社静和堂



小誌で掲載しているJR東日本社外からの寄稿文や、対談・インタビューなどでの発言の内容は、必ずしもJR東日本の見解を反映しているものではありません。



働くママのために
駅には何が
できるのか

働く女性の増加により、ワーキングマザーは近年増加傾向にあります。

少子高齢化に対応するには、合計特殊出生率^{*}を上げる必要がありますし、生産年齢人口減による労働力減少に対応するには、働く女性・働き続ける女性を増やすことが求められます。日本の将来を考えると「子どもを産み育てる」「働く」を両立させるワーキングマザーのさらなる増加が望まれるわけです。

そのためには、子どもを産んでも働き続けることができるような環境の整備や、子育てをしながら仕事をする女性へのサポートが求められます。

仕事と子育ての両立で、毎日をとにかく忙しく過ごすワーキングマザー。通勤経路にある駅はそんな彼女たちの生活動線の一部であり、この立地特性が彼女たちをサポートする上で有効活用できるのではないのでしょうか。

今号では、ワーキングマザーとして日々奮闘している女性4名へのインタビュー調査、そしてさまざまな立場からワーキングマザーの支援に取り組む方々への取材を通じて、「働くママのために駅ができること」を探っていきたいと思います。

※合計特殊出生率：一人の女性が一生の間に産む子どもの平均数。厚生労働省の人口動態統計によると、2014年は日本全体で1.42。都道府県別では、東京都が最も低く1.15。2.07を下回ると人口は減少するといわれている。

ワーキングマザーへのインタビュー調査

仕事に家事に子育てに、忙しいワーキングマザーたちは毎日どのような一日を過ごし、その中で実際どのような不自由を感じているのでしょうか。乳幼児から小学生までの子どもを育てながら、企業で正社員として仕事を続ける首都圏在住のワーキングマザーにインタビューを実施し、詳しくお話を伺いました。

Aさんの一日

04:00	起床。身支度を済ませる。
05:00	オンライン英会話の時間。今後の仕事での必要性を感じて始めたばかり。自己投資もしっかりしておきたい。
05:30	部屋の掃除と朝食の準備。
06:00	子どもと夫を起こす。子どもに身支度をさせてから、家族全員で朝食を取る。
06:30	自分だけ早目に朝食を済ませて家を出る。洗濯と、保育園に子どもを送るのは出社の遅い夫の役目。電車の中ではスマホでメールとニュースのチェック。
07:15	出勤。
12:30	生徒と一緒に給食で昼食。
18:30	退勤。保育園の預かりが19時30分までのため、この時間がリミット。10分でも遅れると、駅から走ることに。
19:20	無事に保育園にお迎え。子どもの笑顔にほっと一息。
19:30	帰宅。夕食の準備。
20:00	子どもと夕食を取る。夫が帰っていないければ、片付けをしながら夫用の夕食の準備をしておく。
20:30	子どもと一緒に入浴タイム。
21:00	子どもと遊ぶ。絵本を読むことが多い。夫も帰宅し、つかの間の家族の時間。
21:30	就寝。朝型なので、子どもと同じタイミングで寝てしまう。

朝型生活へのシフトで自分の時間をつくり出す

教師 34歳 東京都渋谷区在住
通勤/初台駅⇄御成門駅 家族構成/夫、娘(3歳)

Aさん

保育園に子どもを迎えに行くためには、毎日18時30分に職場を出なければなりません。時間通りに出られることはなかなかないので、毎日駅からダッシュします。延長保育終了の19時30分ギリギリに滑り込むと娘が1人で待っていて申し訳ない気持ちになります。

夜の時間に仕事を延ばせないの、朝早めに出勤する“朝残業”でカバーしています。朝残業の日は、朝食も取らずに6時前に出発しますが、途中の駅で何か食べたいと思っても、どこも開店前なのが残念です。これから仕事で必要になりそうなので早朝にオンライン英会話も始めました。働く母親が育児と家事以外で何かをしようとする、起床を早めるしかありません。子どもが生まれてから完全な朝型になりました。

夫の勤務先がフレックスタイム制で朝の時間に余裕があり、保育園への送りなどを手伝ってもらえます。ただ、子どもが熱を出したときは困りもの。夫も自分も仕事を休めない場合は、訪問型の病児保育サービスなどに頼らざるを得ません。

最寄り駅から保育園までの間にはコンビニが2軒あるだけで、平日にまとまっ

た買い物をするのは難しい状況です。食料品も日用品もほぼ通販ですが、この宅配の受け取りの負担が意外に大きいのです。20~21時に時間指定をしても、その時間内でいつ届くのか分かりません。子どものお風呂などやるべきことが多い中で待機するのはつらいです。早朝に配達してもらえるか、駅で自分の都合のいいタイミングで受け取れるようなサービスがあれば便利だと思います。

通販に頼る中で、エキナカでの買い物は楽しみになっています。たまに立ち寄る新宿駅で買えるベーグルは家族全員のお気に入り、新宿に寄る日の翌朝の朝食はベーグル。ただ、駅の買い物で困るのは、レジが混んでいて電車に間に合わなくなる。商品に戻って慌てて電車に飛び乗ることもあります。電子マネーやセルフレジが広まってスムーズに買い物できるようになるとうれしいです。

平日は仕事と育児に追われているので、休日は家族でのんびり過ごします。夫の協力もあって、月に1度は、門限なしで友人と食事に出席する日を設定しています。短くても自分の時間をつくることで活力が湧いてきます。



駅で気分を切り替え笑顔で子どもをお迎えに

販売業務職 34歳 東京都荒川区在住
通勤/日暮里駅⇄恵比寿駅 家族構成/夫、娘(2歳11カ月)

Bさん

子どもを保育園の2歳児クラスに預けてフルタイムで働いていますが、夕方のお迎えの時間に間に合わせるため、毎日が戦いです。夫も残業が多い仕事で、実家も遠いため、保育園には必ず私が迎えに行きます。絶対に定時で仕事を切り上げて保育園に駆け付けなければ、というプレッシャーは厳しいですが、なんとか頑張っています。

一度、出張で富山に行ったときに豪雪で電車が止まって予定通りに帰京できなかったことがあります。保育園に連絡を入れて待ってもらったのですが、こういった突発的なトラブルへの対応には頭を悩まされます。

どんなに仕事で疲れていても、子どもを迎えに行くときは笑顔で「ただいま!」と元気なママを演じます。仕事の疲れは私の都合なので、子どもの前では見せないようにと頑張るのが大変です。

よく利用しているのが、自宅最寄り駅のecute日暮里です。品川や上野のように規模は大きくないですが、おいしいパンと和食の総菜の店が気に入っていて、週3回くらい寄ります。私は、毎日夕食には一汁五菜を食卓に並べるように心掛

けているので、ecuteで総菜を買い足せるのはとても助かっています。

ecute日暮里では、期間ごとにショップが替わるイベントスペースもお気に入りです。期間限定のスイーツショップやベーカリーなど、忙しい中でちょっとしたサプライズがあるのがうれしいし、同じ場所に通っていても飽きません。また、朝、早く出てほんの少し時間に余裕ができたときは、ecuteのカフェでコーヒーを飲みながら時間調整することもあります。数少ないほっとできる時間です。

ギリギリのスケジュールで生活している中で、帰り道に時間をかけずに買い物を済ませることができ、いろいろな楽しさも味わえるエキナカが好きです。

私にとって駅は仕事モードから母親モードにスイッチが切り替わる所でもあります。笑顔で子どもを迎えに行くためにも、駅で10~15分くらいヨガやストレッチができる教室があったら気分転換ができていいなと考えています。

さらに望むとしたら、駅構内に調剤薬局があれば、子どもの病気のときなど薬を受け取るのに非常に便利になると思います。

Bさんの一日

05:30	起床。自分の朝食を済ませ、身支度、家族の朝食・夕食の準備、部屋の掃除を一気にこなす。
06:30	子どもを起こし、朝食を取らせ、身支度をさせていると夫が起きてくる。家を出るまでの時間はこまめに掃除。
07:30	家族3人、一緒に家を出る。夫と別れ子どもを保育園へ。日によっては夫が送り届けてくれる。
08:00	職場へ向かう。電車内では、スマホでメールチェックや調べもの。すでに仕事モード。
08:50	出社。
12:30	ランチタイムは貴重な自分の時間。同僚を誘ってランチを楽しむ。
17:00	退社。会社帰りの車中は何もせず過ごすことが多い。時間に少し余裕があるときはエキナカでスイーツショップなどに立ち寄ることも。
18:00	保育園のお迎え。時間ぎりぎりになってしまうことが多いので、引き取るほっとする。
18:45	帰宅後すぐに夕食。基本的に一汁五菜をそろえるが、週末や朝に準備を済ませているので、それほど時間はかからない。
19:15	夕食の片付けと、夫の夕食準備。子どもはテレビタイム。
19:45	先に自分だけシャワーを済ませる。
20:15	子どもと遊ぶ。そのままお風呂に入れる。
21:30	夫、帰宅。子どもを寝かしつける。
21:45	夫の夕食、片付け。
22:15	部屋の掃除、洗濯、明日の準備など。時間があればテレビを見る。
23:00	就寝。

Cさんの一日

06:00	起床。家族の朝食の準備。
06:30	子どもを起こす。小学生なので、自分で身支度を済ませ朝食。朝は慌ただしく、自分は朝食が取れないことも多い。
07:00	夫が家を出る。
07:30	子どもと一緒に家を出る。PTAの登校を見守る活動に参加。
08:00	職場へ向かう。駅のトイレでメイクを済ませ、乗り換え駅で朝食用のおにぎり野菜ジュースを購入。
09:30	出社。メールをチェックしながら、朝食。
13:00	ランチは外食。
18:00	仕事が残っているため残業。夕食作りや子どもの世話は、早めに帰宅する夫の分担になっている。
20:00	退社。会社を出たことを夫にメールする。帰りの電車では、SNSにふけるのが日課。唯一の自分の時間。
21:30	帰宅。夕食を簡単に済ませる。
22:00	夫を誘って24時間営業のスーパーへ。食料品は週末にまとめ買いするが、足りない物を補充。つかの間の夫婦の時間にもなっている。子どもは各自お風呂タイム。
22:30	洗濯、掃除、食器洗い、部屋の片付けなど家事をこなしてから入浴。
23:30	アマゾンや楽天市場などでかさばる日用品を買って置く。
00:00	就寝。



家族のサポートで忙しい毎日乗り切る

WEBデザイナー 35歳 神奈川県相模原市在住
通勤/多摩境駅⇄外苑前駅 家族構成/夫、娘(小学6年)、息子(小学2年)

Cさん

新卒で生保の営業の仕事に就きましたが、すぐに結婚、妊娠で退職して2年間専業主婦をしていました。子どもを保育園に預けられるようになって、派遣社員としてWEBデザインの仕事を始め、子どもの成長に合わせて、契約社員、正社員とステップアップ。上の子が小学校高学年になり残業のある今の仕事に転職したのですが、WEBサイトのリリースが近くなると、終電まで働くこともよくあります。

夫のサポートがなければとても続けられないと思います。夫は遅くても20時ごろには帰宅できるので、子どもの夕食の面倒を見て、洗濯機も回しておいてくれます。私が帰宅するころには、洗濯が終わっているので、干すのは私。畳むのは子どもたちがやってくれます。

朝はPTAで登校の見守りの当番になっているので朝ご飯も食べずに出発。その後で出勤し、途中、駅のトイレでメイクをするので、もっとパウダールームが充実している駅が増えてほしいと思います。それから乗り換えの多摩センター駅や表参道駅で、サンドイッチやおにぎりなど自分の朝ご飯を調達して会社に出掛けています。

帰日も駅で軽めの夕食が食べたいと思うこともあるのですが、帰りが遅い日は駅構内の店が閉まっているので残念です。終電まで営業時間を延ばしてほしいですね。食事以外では、会社を出るときにスマホで注文したものを、駅で受け取れるようなサービスがあると、時間の短縮につながると思います。

平日は子どもたちと過ごす時間がほとんどありません。その分、週末は子どもたちと向き合おうと、子どもが熱中しているサッカーを私も始めました。親子サッカー教室や、母親のチームもあるので参加してみて、共通の話題が増えるかなと思ったのですが、子どもたちからは「下手だね」と言われるくらいですね(笑)。子どもたちのチームの試合の日は、集合が午前5時ということもありますが、前日の仕事でどんなに遅くても早起きして送っていきます。仕事も忙しいのですが、肉体的には土日の方が厳しいです。

サッカーを始めてスポーツと食事の関係に関心が湧き、「ジュニア・アスリートフードマイスター」の資格が気になっています。仕事帰りに駅などで講座を受ける機会があるといいと思います。



宅配サービスを利用しつつ会社帰りに不足品を買い足し

IT系企業事務職 39歳 東京都中野区在住
通勤/笹塚駅⇄原宿駅 家族構成/夫、娘(1歳11カ月)

Dさん

育児休暇を予定より少し短縮して先月職場に復帰しました。出産後も仕事を続けようと思ったのは、社会と関わっていたいという気持ちが強かったからです。年齢的に一から新しい職場を探すのは難しいし、ブランクをできるだけ短くして職場復帰することを考えていたところ、欠員が出たと聞き、育休の短縮を決めました。母親としても社会と関わっていた方がよいと思ったし、経済面でも自分の収入があった方が気持ちに余裕が持てますね。

急に復職することになったので保育園も決まっておらず、近所に住む実家の母のサポートを受けながら、育児・家事と仕事を両立させています。食料品の買い出しは宅配サービスを利用しています。便利なのですが、週1回の注文と配達というシステムなので、どうしても毎日の生活で足りない物が出てきます。そんなときは、仕事帰りに自宅最寄り駅近くのスーパーに立ち寄るのですが、子どもを連れたの買い物がとにかく大変です。

「元気に育てほしい」という方針を最優先にしていたら、元気というよりおてんばになってしまって(笑)。活発なのは

親としてもうれしいのですが、買い物中にベビーカーから降りて動き回ったり、商品をいじったり、目を離れた隙にパッケージを開けてしまったり。店内の通路が狭くてベビーカーで通れない売場に欲しい物があるときなど、子どもを抱いて歩か、買い物を諦めるか、本当に悩みます。買い物中に10分単位でいいので子どもを見てもらえるようなサービスがあったら助かると思います。

子どもが生まれてから、ゆっくり自分の買い物をする時間はなくなり、食品、日用品から洋服までネット通販を利用することが多くなりました。実際に出掛けられるのは短時間で買い物できる駅ビルです。自宅最寄り駅の駅前に商業施設ができてからは、夕食のおかずを追加できるような総菜や、朝食用のパンなどを買いに通っています。好みのパンの焼き上がり時間も分かっているので、悩まず時間をかけずに買うことができて便利です。

休日も駅近くのレストランに家族で出掛けることがあります。電車が見えて子どもの注意がそちらに向くので、動き回ったりいたずらしたりという心配が減って助かっています。

Dさんの一日

06:00	起床。時間が合えば、夫と一緒に朝食を取り、自分の身支度を整える。
07:00	子どもを起こし、朝食と着替えを済ませる。
07:55	子どもと家を出て、駅へ向かう。
08:15	駅で母親と落ち合い子どもを預ける。保育園が決まっていなのが一番の悩みの種。
09:00	出社。
12:00	ランチは毎日、外食。数少ないリフレッシュできる時間。
16:00	退社。電車での移動中はスマホでネットを見ていることが多い。
16:45	駅で母と待ち合わせ子どもと合流。夕食の食材は宅配でまとめ買い。足りない物が出てきたら、会社帰りに必要な物を買って足しに。
17:30	帰宅。子どもと一緒に風呂タイム。
18:45	夕食準備。子どもは一人で遊ばせておく。
19:00	子どもと夕食。
20:00	夕食の後片付けを済ませてから子どもとたっぷり遊ぶ。子育ての楽しさを感じる大切な時間。
20:30	夫、帰宅。
21:00	子どもを寝かしつけ、洗濯、翌日の朝食・夕食の下ごしらえなど、家事を済ませる。
23:00	つかの間のリラックスタイム。何げないことを夫と話したり、テレビやネットニュースを見て過ごす。
00:30	就寝。

ワーキングマザーに必要なサポートとは。

ワーキングマザーにとって、本当に必要なサポートとはどのようなものなのでしょうか。日々の子育てや生活の困り事を支援する以上に、もっとさまざまなかたちで、彼女たちを支援する取り組みがすでに始まっています。そんな中で、駅はどのような役割を担えるでしょうか。そのヒントを探ってみました。

育休後カフェ

“育休後”のママだけが集まるコミュニティ。
このコミュニティが働くママに自信を取り戻すきっかけを与えます。

ワーキングマザー同士で語り合える空間と時間を提供

育児休暇後の働き方を考えるためのリラックススペース「育休後カフェ」。働く親にとって参加しやすい土曜、日曜に、カフェやコミュニティスペースなどに集ってもらい、仕事と子育てに追われるワーキングマザーに、自分とじっくり向き合う空間と時間を提供しています。

主宰する山口理栄さんは、“育休後”に初めて光を当てたパイオニアです。「育休を取って復帰した人も管理職になっていくべきなのに、企業はそういう育成をしていないですし、本人たちもそういう気持ちで働いていない。それは大きな損失です。育休後についてもっと真剣に考えるべきだと感じて、そこにフォーカスしたコンサルティングをしようと思ったのです」。山口さんは、総合電機メーカーで女性活躍推進プロジェクトのリーダーとして、ダイバーシティ・マネジメントの推進に尽力したのち独立。育休後コンサルタントとして、法人向けの研修や職場復帰セミナー、個人向けの相談会などを行い、子育てしながら働く女性の、出産後のキャリアアップを支援しています。



01

「女性の場合、非正規社員が多い上に、育児休暇を取るための条件が厳しく、多くの人が出産を機に仕事を辞めてしまいます。そのため、実際に育児休暇を取得できる人はまだまだ少なく、日本全体で見ても年間20万人ほどしかいないのが実情。だからこそ、そこにきちんと目を向けたかったのです。子育てママという大きなくりで捉えたコミュニティはあっても、そこでは悩みを共有できません。むしろ、ワーキングマザーは肩身が狭かった。育休中あるいは育休後のママたちのコミュニティがなかったために、それぞれの会社や家庭で、孤独に悩むしかなかったのです」と山口さん。そんなワーキングマザーが集まってお互いに話をするのであれば、状況は変わるのではないか。そんな思いで始めたのが

「育休後カフェ」でした。

自分と向き合い互いに刺激し合ってレベルアップしていける

「育休後カフェ」では、「時間制限の中で働く限界と工夫」「パートナーに感謝している点と改善してほしい点」「子育てと仕事のバランスで悩んでいること」などのテーマを設け、参加者同士でお互いの話に真剣に耳を傾けながら、たつぷり語り合います。参加者にはどんな問題を抱えているかを事前に申告してもらい、取り上げるテーマは、当日の参加者の悩みに合わせて適宜変えていきます。

事情は違っても、同じような境遇にある者同士、「夕飯は毎日買ってきた総菜ばかりで」と言っても責める人はいません。本音で話しながら、互いの悩みや

日々の工夫、乗り越えてきた壁などを知ることができ、時には山口さんからの的確なアドバイスも聞くことができます。

キャリアアップしたくても、子育てに時間を取られてなかなかうまくいかない。また、会社は時短でしか働けない自分に、もはや期待していないのではないかなど、悩みや不安を抱え込んでやってきた参加者たち。参加後には、「気持ちを話すだけで整理がついた」「自分ができることをやっている人を見て、勇気もらった」など、一様に満足感や前向きな気持ちを口にします。

「日本の女性は、とかく自分のことを後回しにしてしまうところがあります。自分のキャリアアップを考えること自体、いけないことだと思っている人もいます。子どもにも夫にも、同僚にも、迷惑を掛けていて申し訳ないという罪悪感が強く、自分がどうしたいかを考える機会がないのです。『育休後カフェ』は、自分と向き合える貴重な時間です。また、同じ境遇のさまざまな人たちと話をすることで、勇気もらったり、勇気を与えたりすることもできる。互いに刺激し合って、レベルアップしていける場でもあるのです」。

「育休後カフェ」のようなコミュニティが、失いかけていた自信を取り戻すきっかけとなり、キャリアアップに対する意識を前向きに変えていくのかもしれない。かつての参加者の中には、その後キャリアアップに積極的に取り組み、社内で研修を企画する立場となって山口さんに講師を依頼した方もいたそうです。



02

小さな意識の変化の積み重ねが社会の変化につながっていく

小さな意識の変化でも、その積み重ねが少しずつ状況を変えていくと山口さんは言います。「例えば、子育て中でも行きたい出張を諦めたくないと思うだけで、多くのことに変化が現れます。出張に行くために、自分がない間の家庭をどうするか夫と話し合う機会が生まれますし、方法を工夫しようと考えます。会社に対しても、子育て中の女性を出張の対象外にするという過剰な配慮を改めるきっかけがつかれます。もちろん、無理なときには無理と言える良好な人間関係をつくっておくことも大切です。結果、仕事にやりがいを感じるようになって、忙しい毎日に充実感を得られるようになっていくのです。これらのことは、最初から出張を諦めてしまえば、何も考えなかったことですし、起こらなかったことです」。一方、会社側に対しても、時間をかけて育てた人材を無駄にしてしまう損失の大きさに気づき、育児休暇後の女性のキャリアアップを真剣に考えてほしいと、山口さんは言います。

人が集まる駅を活用できれば社会の関心を高められる

「育休後カフェ」の開催は、月2回ほど。山口さんの地元である横浜市で毎月1回行われるほか、首都圏の各地でも不定期で開催されています。参加者は1回の開催で平均5~10人。都内のアクセスのいい駅周辺で開催したときには、20人



03

くらい集まったといいます。「駅で開催できるようなスペースがあれば、とてもありがたいですね。働くママにとっても参加しやすいですし、駅に『育休後カフェ』の案内が掲出されれば多くの人の目に触れ、多くの人に参加のきっかけを与えられます。パパが駅で目にして、ママに教えてあげるなんていう可能性もあると思います」。そうして、少しずつ育休後のワーキングマザーに対する社会の関心が高まり、キャリアアップのチャンスが広がっていくことが、山口さんの夢だと言います。

◎育休後カフェ(育休後コンサルタント.com)
<http://1995consultant.com/>

01 山口理栄さんをファシリテーターとして、土曜や日曜に開催されている「育休後カフェ」。主に、育休後カフェの活動に賛同する地域のカフェが主催となって行われている。子ども連れでの参加ももちろんOK

02 初参加の人だけでなくリピーターも多い。それぞれ事情は違っても「育休後」の悩みには共感できる部分が多く、話をするだけでも前向きになれるのだという

03 ワーキングマザーたちが語り合っている間、子どもたちが退屈しない工夫も

04 東京都北区、横浜市、さいたま市など、さまざまな地域で開催されている「育休後カフェ」。チラシ告知の他、TwitterやFacebook、LINEなどのSNSで情報を得て参加する人も多い



04

東京 ワーキングママ大学

キャリアアップに危機感を募らせるワーキングマザーの悩みに応えるより具体的なソリューション。ワーキングマザーによるワーキングマザーのための大学をご紹介します。

キャリアアップを支援する 実践型ビジネススクール

社会の流れは女性の活躍推進に向かっているとはいえ、現実とのギャップはまだ大きい。子どもを生んだ女性が育児休暇を終えて時短勤務で会社に復帰すると、責任ある仕事から外され、研修の機会も与えられず、キャリアアップという面では頭打ちになってしまうのが現状です。そんなワーキングマザーたちの悩みに応えようとスタートしたのが、「東京ワーキングママ大学」。子ども連れで参加できる実践重視のビジネススクールで、キャリアアップを目指すワーキングマザーの挑戦を支援しています。

「ママでもキャリアアップの道が開かれていて、自分の働きたいスタイルを選択できることが本来あるべき姿だと思うのです」。そう語るのは、「東京ワーキングママ大学」を運営する日本ワーキングママ協会代表理事の大洲早生李さん。ご自身も3人の子どもを育てながら会社を経営する、現役のワーキングマザーです。

「東京ワーキングママ大学」は、運営するスタッフの9割以上が現役のワーキングマザー。それぞれ仕事を持ちながら、プロボノ(プロフェッショナルな知識やスキルを生かしたボランティア)というかたちで運営を担っています。

プログラムは全て 現役ワーキングマザーが考える

カリキュラムは、企業の最前線で活躍するためのスキルとマインドを身に付ける「ウーマンリーダーコース」と、子育てしながら無理なく起業する方法を学ぶ「ママ・プレナーコース」という、3カ月で学ぶ2つのコース。そして、月に1~2回行われる単発講座のオープンカレッジがあります。

オープンカレッジは、ビジネス、ライフ、子育てという3つのカテゴリで講座が構成されていて、その内容も多彩。ロジカルシンキングや交渉術、ワークライフバランス、親子コミュニケーションやグローバル人材を目指す子育てなど、ハイキャリアな人たちを意識したテーマを選んでいくといいます。

一般的なビジネススクールとの大きな違いは、子ども連れで受講できることもさることながら、講座内容を全てワーキングマザー向けにカスタマイズしていることです。そこは、現役のワーキングマザーがスタッフであることの強み。「時短

で結果を出す仕事術」「ママになってからのキャリア論」「ママのための身だしなみ・立ち振る舞い術」など、講師と綿密に話し合いながら、ワーキングマザーの悩みをストレートに解消できる内容、より実践的なプログラムに練り上げていきます。「ただでさえ忙殺される毎日を送っているママたちが、わざわざ休日に、子ども連れで2時間も3時間も勉強しに来るので、そこまでしても受講したことに価値が感じられるようなコンテンツを用意しないと意味がありません」と大洲さん。

スキルを磨いて存在感を高めれば キャリアアップの道は開けない

「東京ワーキングママ大学」にキャンパスはありません。講座は、さまざまな場所で行われますが、実は会場選びにもこだわりがあります。活動に賛同する企業に、無償提供してもらっているのです。「お金を払って会議室を借りることは簡単ですが、企業を巻き込んで理解を広げたいのです。現在は、4~5社に協力いただいています。ただ、状況の変化などで協

力できなくなる企業もありますから、会場の確保は大変です。毎年、さまざまな企業に日参して理解を求め続ける努力を続けています」。

大洲さんが企業の理解にこだわるのには、理由があります。「ワーキングマザーは、職場ではマイノリティーなので、時短でしか働けない人材は要らない、というのが企業の本音。人材不足が叫ばれている状況はあっても、ママを求めるほどには枯渇していないのでしょう。その人の能力を見る前に、ママというところで見てしまう。だからこそ、企業の理解を広げないといけないし、一方で、ママも実力を磨かないといけない。そこにワーキングママ大学の意義があります」。

ワーキングマザーのキャリアアップにとって、最も大きな壁はやはり時間。長時間労働が当たり前の日本では、働ける時間の長さが評価ともリンクしてしまうため、時短で働くワーキングマザーの危機感は大きい。そういう人たちが、スキルアップを求めて「東京ワーキングママ大学」へやってきます。

受講者は、8割が正社員として企業で働いている人たち。育児休暇中、あるいは育児休暇取得後3年以内という人がメインです。子どもが小さく、子育てと仕事の両立が一番難しい時期。キャリアに対する意識が高い分、悩みも深く、ワーキングマザー同士のネットワークへのニーズも受講の動機になっているといいます。同じ悩みを抱えながらも、業種などのバックグラウンドが違う人たちと出会うことによって、勇気をもらえると同時に、よきライバルにもなれる。

「3ヶ月コースの卒業生たちのコミュニティ育成にも、力を入れています。みんな意識が高いですから、コミュニティはちゃんと自走していて、年4回、自主的にワークショップなどを企画・開催しています。いずれ、そこから新しいビジネスが

生まれたらうれしいです」。

とにかく時間が足りない日々 何事も短時間・高効率のポイント

「東京ワーキングママ大学」では、今年9月から新たな試みにチャレンジします。コンサルティング会社との協働による「Work Smarter!」というプロジェクト。非正規職員や再就職を目指す子育て中の女性を対象にして、短時間で高効率に働くためのノウハウを学ぶプログラムを提供します。「基本的には男女の賃金格差をなくすことを目指すプロジェクトです。そのためには、短い時間で効率よく賢く働くことが必要。特別なスキルがなくても、働き方によって高効率になれる方法をインプットして付加価値を付けた上で送り出したいと考えています」。

ワーキングマザーは、とにかく時間がないと大洲さんは言います。「自分の趣味と睡眠時間を削って、なんとか60分くらい家事の時間を捻出しているという状態。もちろん移動中も、今動いている仕事の進行状況をスマホでチェックしたり、その後の行動をシミュレーションしたり。1分たりとも無駄にできません。それこそ駅の改札へ向かう動線上に臨時売店を設置して、夕食用の食材を売ってほしいくらいです。ママの行動観察やヒアリングをやると、動線上に物やサービスを置かないと手を出さないことがはつきりしています」。高効率な働き方がキャリアアップのための条件であるワーキングマザーにとって、まさに生活動線上にある駅への期待は大きいといえます。

◎東京ワーキングママ大学
<http://wm-univ.com>



02



03



04

01 多彩な講師陣をそろえる「東京ワーキングママ大学」。社会情勢や時代の流れに応じて、ワーキングマザー向けにカスタマイズされた講義は、実践的であることが大きな魅力となっている

02 内面をレゴ・ブロックで可視化する、NASAにも採用されたワークショップ「LEGO® SERIOUS PLAY®」のオープンカレッジ。話題性のあるこうしたプログラムも積極的に取り入れている

03 3ヶ月コースでは、コミュニケーションやプレゼンテーションのスキルアップ、実際の課題に取り組むトレーニングなどを行う。また次の講義までに取り組む宿題や課題図書もある

04 課題をやり遂げ、すべてのカリキュラムを修了すると、卒業証書が授与される。共に学んだ同期生とは、ママ友として、またビジネスパートナーとして、関係が続くこともあるという



01

流山市 子育て支援施策

高齢化や人口流出に悩む自治体が多い中、画期的な施策を次々と打ち出し、共働き子育て世帯の支持を集める流山市。その魅力の秘密を探ります。

駅で子どもを預かり

バスで市内の保育園に送迎する

「働きながら子育てができる街」を目指す施策で、30代を中心に順調な人口増加が続く千葉県流山市。その目玉となるのが、つくばエクスプレスの流山おおたかの森駅と南流山駅の2カ所に設置されている「駅前送迎保育ステーション」です。駅前子どもを預かり、バスで市内の認可保育園に送迎する仕組みで、働く親にとっては、それぞれの保育園まで送迎する手間がなく、通勤のついでに駅で子

どもの送り迎えができるというサービス。しかも、「駅前送迎保育ステーション」には保育園の分園を併設しており、残業で帰りが遅くなるような場合でも、夜9時まで預かってもらうことができます。

「そもそも、待機児童解消策でした。共働きの子育て世帯にとって利便性の高い駅周辺に、保育園をいくつもつくることは難しい。でも、駅から離れた郊外の保育園には多少の空きがありました。ならば、駅に預けてもらってそこから送迎すれば、郊外の保育園を利用することが可能になるのではないかと考えたのです」。そう話すのは、流山市役所マーケティング課メディアプロモーション広報官の河尻和佳子さん。「駅前送迎保育ステーション」の登録者数は、約140名。保育園の定員はおおよそ100～150名であることが多いので、保育園を一つ整備したのと同じくらいの待機児童解消につながっているといいます。

園児たちの送迎を委託しているのは、市内でいくつかの保育園を運営している社会福祉法人。子どもに負担が掛からな

いよう、複数のバスを使って短い乗車時間で送迎するなど、運行にはこまやかな配慮も必要です。「たくさんのお子さんを送迎しなければなりませんから、しっかりしたノウハウがなければスムーズに運行できません。経験豊かな事業者があったからこそできたことです。また、『駅前送迎保育ステーション』を設置したビルの事業者へは、雨にぬれずに移動できる駐車場の利用や、子どもが安心してバスの乗降ができるよう送迎時間帯に他の車の出入りを制限することなどを、話しながら決めました。民間の事業者との協力関係がなければ実現できなかったと思います」。

市政にマーケティング戦略を導入

共働き子育て世帯にターゲットを絞る

「駅前送迎保育ステーション」のような思い切ったサービスが実現できた背景には、流山市のユニークな市政が大きく関わっています。2003年に就任した井崎義治市長は民間のシンクタンク出身者で、自治体としては異例のマーケティング課を設置。ポジショニングやターゲットの整理など市政にマーケティングの視点を導入しました。

流山市は、東京のベッドタウンとして成長してきた閑静な住宅街。目立った産業や大きな企業が少なく、住民の高齢化が進めば市の歳入は減り、市民サービスを支え切れなくなるという危機感がありました。そこで対策を考えるに当たってマーケティングの視点が用いられました。

戸建てエリアが多く、住居が広い。2005年のつくばエクスプレスの開通によって都心まで20分ほどで行けるのに、森や公園など街全体に緑も多い。「働く場所に近くて、しかも子育てのための住環境が充実している」という強み分析の結果から出てきたのが、都心で働く、30～40代の共働き子育て世帯というター



02

ゲット設定でした。そのターゲットが本当に求めるサービスを提供すれば、転入を促進できると考えたのです。実際、この戦略は大きな効果を生み、10年前に比べて人口は2万人増え、高齢化が進んでいた人口構成は、30～40代が最も多い層となりました。

駅をハブとして、子育て世帯の交流や市外に対するプロモーションも行う

「駅前送迎保育ステーション」はハード面から共働き子育て世帯を支えています。流山市は子育て世帯の交流というソフト面にも力を入れています。そこでもやはり、駅が大きな役割を果たします。流山おおたかの森駅南口前に広がる、緑豊かな公園のような広場。駅前でありながら車の進入はできません。駅に人が集う機能を持たせようと、計画段階から市が関与し一緒に考えました。普段は子どもがボール遊びをしていたり、家族連れがお弁当を広げる姿も見られるこの広場で、季節ごとに子育て世帯が集うイベントを行うのです。

毎年8月に開催されるのは、子育て中のママやパパが気軽にお酒飲みできる「森のナイトカフェ」。2015年は4日間でおおよそ4万5000人が来場する盛況ぶりでした。イベントをきっかけにして、子育て世帯のコミュニティが生まれ、地域での活動のきっかけをつくる狙いがあります。さらに、流山市外の人たちに対する



03

プレゼンテーションの場でもあり、流山市役所マーケティング課シティセールスプロモーションマネージャーの筒井秀夫さんは言います。「市民の方には流山市に住んでよかったというシビックプライドを持ってほしいですし、市外の方には街の雰囲気を生で感じてほしい、住んでみたいと思ってほしい。ですから、駅前で上質感のあるイベントを開催して、流山市のファンになってもらうのです。おかげさまで、来場者の半分は市外から来ていただいています」。

子育て世帯の支援が街全体を豊かにし、魅力を高めていく

流山市では、子育て世帯が増加したのに伴い、4歳以下の子ども数も増えています。合計特殊出生率は1.5と首都圏の中では非常に高く、安心して2人目、3人目を出産していることが分かります。「子育て世帯の転入は、子育て環境の整備に費やす費用を考えるとプラスマイナスゼロです。でも、子どもが成長して家庭を持ったときに、親世代が流山に住んでいれば、帰ってきてもらえる可能性は高い。子ども時代を楽しく過ごして、いい街だと実感していれば、きっとそうしてくれるはず。そうならば、若い世代が今後も一定数入ってくるが見込めます。将来を見据えて、先行投資で子育て世帯の転入に力を入れているわけ」と河尻さん。



04

今後は、ママの起業支援も行っていきます。地元で働く場所が少ない市にとって、ママたちの潜在スキルを目覚めさせて地域で起業してもらえれば地元経済の活性化にもつながると期待します。

手を緩めることなく、次々と施策を繰り出す流山市。「これからも流山市に住み続けたい」と答える市民は8割以上に上ります。子育て世帯は、子どもを通して地域に根差すため、コミュニティが生まれやすいという特徴があります。子育て世帯を支援し、増やしていくことは、結果として街を豊かにし、魅力を高めていくのかもしれない。

◎流山市(公式PRサイト)

<http://www.nagareyama-city.jp>

01・02 1日100円、1カ月2000円で利用できる「駅前送迎保育ステーション」は1年単位の登録制。延長保育は、最長で平日は夜9時まで、土曜は夜7時まで(夜6時以降は別途有料)と働くママには心強い。有料で夕食を用意してくれるサービスもあり、安心して子どもを預けておくことができる

03 「森のナイトカフェ」は、毎年恒例となった夏の人気イベント。噴水アトラクションやアクアディスコなど、毎年趣向を変え、子どもが思い切り遊べる仕掛けを施している

04 流山おおたかの森駅の南口はロータリーがなく、緑あふれる公園のような空間。ショッピングセンターにも隣接しており、子育て世帯の憩いの場となっている



01

子育てシェア

地域コミュニティが消えつつある今、あえて地域で頼り合う子育てを目指す取り組みがあります。株式会社AsMamaによる、地域共助を復活させる仕組みとは。

インターネットを活用し

子育てをご近所同士で頼り合う仕組み

「子育てシェア」は、同じ保育園や学校に通う子どもの親や顔見知り、友達とインターネットを活用してつながり、子どもの送迎や託児などを頼り合う仕組みです。お礼は基本的に1時間500円。近所に友達がいないう場合は、世話役のママサポーターが支援してくれます。

こうした「子育てシェア」を運営しているのは、ベンチャー企業の株式会社AsMama。「近くに子どものことで頼れる知人がいないという人がいる一方、家

事・育児をしながらも社会や地域に関わりたいと思っている人も多くいます。そんな現状を、なんとかしたかった。助けてほしい人と助けたい人が安心して出会える場と、気兼ねなく頼れる仕組みがあれば、どちらも経済的、精神的に豊かになれるのではないかと思ったのです」と代表取締役社長・CEOの甲田恵子さんは言います。「何より、子どもにとって安心できるのは、親のことも子どものこともよく知っている人が預かってくれる環境です。とはいえ、今の時代は、近所にコミュニティなどありません。近所の人と友達になるきっかけを、人工的にでもつくっていかねばいけません」と。そこで考えたのが、地域交流イベントという出会いの場とITを活用した仕組みという、リアルとインターネットの両輪で構築するコミュニティでした。

人間関係の難しさをシステムで解消 突然の支援依頼も約8割が解決する

「子育てシェア」を利用するためには、まずインターネットからの会員登録が

必要です。その際、子どもの保育園や小学校などの情報を入力しておく、同じ保育園や小学校の親同士は自動的にグループングされます。さらに、会員の中から知り合いを探したりSNSを活用して友達を招待したりなどでネットワークを広げていきます。

一方で、全国各地で毎週のように地域交流イベントが開催されており、世話役のママサポーターを中心に会員同士の交流を深めたり、新しい友達を増やしたりすることもできます。そうしてつくり上げたコミュニティをベースにしているため、「子育てシェア」は基本的に顔見知りの人としかつなげられない仕組みとなっており、その中で支援を依頼したり、受けたりするという安心感があります。

例えば、残業などで保育園への迎えが遅くなりそうなときには、インターネットで助けてほしいエリア内にいる友達を数人選んで支援依頼を発信、迎えに行ってもらえる人を探します。依頼者は突然の困り事に対していつでも気軽に利用できる上、依頼される側も自分だけでなんとかなる必要がなく、できるときだけ応えればよいという気安さがあります。さらに、複数の友達からOKの返事があった場合には、依頼を受ける人が決定した段階で、解決済みであることとお礼を伝えるメッセージが自動的に送信されるなど、こまやかな配慮も。インターネットを介することによって、依頼する側、依頼される側、どちらにとっても精神的負担は軽減されます。

また、実際には頼る人は頼る一方、助ける人は助ける一方ということにもなりがち。そこで、お互いが気兼ねしないよう1時間500円というお礼のルールを決め、現金のやりとりには抵抗のある人にはクレジット払いによる自動引き落としも可能にしています。さらに、万が一に備えて最高5,000万円が保証される保険制

度まで独自に整備。人間関係の難しい部分をシステムによって見事に解消し、コミュニティをスムーズに機能させているのが分かります。

いざというときに必ず頼れるツールとして信頼性と完成度を高めるため、常に利用者の声をヒアリングし、今でも毎週「子育てシェア」の仕組みを見直しているといいます。その結果、現在の登録者数は3万人。突然の支援依頼であっても、発信される依頼に対しておよそ8割は解決されています。

企業との提携により 利用者の負担なく仕組みを持続させる

「子育てシェア」への登録は無料。AsMamaはプラットフォームの提供だけを行い、会員からはお金を一切受け取りません。地域交流イベントの場を利用し、企業が持つ情報や商品を、生活や子育てに役立つ情報を求める親たちのニーズに合わせて紹介。AsMamaは、企業と子育て世帯の出会いの場を提供することによって、企業から収入を得ます。それが、会社としての収益となっているのです。

また最近では「子育てシェア」のある環境そのものの魅力に気付く企業との提携も積極的に行っています。共助のある住まいづくりを目指す不動産会社、子育て社員の支援を行いたい企業、さらには沿線活性を目指す鉄道会社などと年間契約を結んでいます。「例えば、沿線活性の一環として鉄道会社と連携して、駅周辺の商業施設などで月に2回は地域交流イベントを開催し、『子育てシェア』を使って沿線に住む人同士が頼り合える環境をつくり出します。交流イベントでは、鉄道会社が開発する分譲地や関連のデパートの催事などの情報提供もします。何よりも、『子育てシェア』のような共助のあるコミュニティがあれば、防犯や

防災、暮らしやすさにつながり、沿線の価値も上がります」。利用者からはお金を取ることなく、企業との提携による収入によって持続可能な仕組みを実現しているといえます。

子育てに限らず、地域共助の仕組みを 社会インフラとして広げたい

「子育てシェア」の世話役として活躍するママサポーターは、約4割が元保育士や幼稚園の先生など保育経験者です。しかし、AsMamaが提供する託児研修を受講さえすれば、性別、年齢、資格の有無は問いません。子育て中や子育てがひと段落した一般のお母さん、あるいはまだまだ元気で地域に貢献したいと考える60代、70代の高齢者もいます。「ある70代のママサポーターの方は、とても楽しくやりがいい感じているので、死ぬまで続けたいとおっしゃっています。支援することによって若い方と交流できますし、自分に何かあれば地域のママが声を掛けてくれます。電球の交換くらいお迎えにきたママがやってくれるのです」。

目指しているのは、地域密着型の保育支援ではなく、頼り合いという地域共助を電気やガス、水道のように社会インフラとして全国の隅々まで広げていくことだと甲田さんは言います。「支援したい人と支援してほしい人が理想的なかたちで出会い、助け合える仕組みがあれば、少子化にも歯止めがかかるかもしれないですし、高齢者も生き生きと暮らせるようになります。子育てにとどまらず、あらゆる場面で共助できる仕組みをつくり出したら、社会はもっとずっと豊かになれると思います」。

©株式会社AsMama
<http://asmama.jp>



02



03



04

01 ネットの仕組みを使い、顔見知りや友達、AsMamaが認定した「ママサポーター」に頼ることができる「子育てシェア」。約80%のユーザーがリピーターになるという

02 AsMamaが開催するイベント「子育て応援フェア」。子育て世帯を応援する企業の出展ブースや「ママサポーター」と出会えるスペースの他、親子で楽しめるワークショップなども開催

03 AsMamaが提供する託児研修を受講した「ママサポーター」。周囲に支援者のいない登録者からの依頼を受けるだけでなく、地域交流イベントなどに参加し、AsMamaの取り組みを地域に広く知らせる活動を行う

04 「子育てシェア」の登録料・手数料は一切なし。マップを使って特定のエリア内から支援者を検索したり、クレジットカードで謝礼の支払いまでできたりと、便利な機能が満載



01

THINKING

ワーキングマザー支援から見えてきたこと

子育て、仕事、自分時間、それぞれにニーズ

子育てと仕事に追われながら、忙しい毎を送るワーキングマザーは、とにかく時間がありません。日々必要な物はネットショッピングや宅配で調達し、慌ただしい朝は駅のトイレで化粧を済ませる、移動中も電車の中で仕事のチェックをするなど、ギリギリの状態でなんとか乗り切っています。

そんなワーキングマザーにとって、最も重視すべきことは時間の有効活用です。それに応えられる、生活動線上で提供されるサービスやスキマ時間を利用できるサービスには、当然大きなニーズがあります。そして、安心して子どもを預けられる環境も欠かせません。特に、子どもの病気や突然の残業など緊急時に対応できる、フレキシブルな保育サービスへのニーズは切実です。

さらに、職場や地域でまだまだマイノリティーであるワーキングマザーは、周囲に同じ境遇の人たちが少なく、悩みを共有する場がありません。「育休後カフェ」が提供するの、そんな状況に手を差し伸べるためのコ

ミュニティーです。

また、ワーキングマザーは仕事と子育ての両立という難題を一人で背負い込んでしまうため、自分を抑えて我慢する傾向が顕著です。しかし、潜在的には自分時間の充実(息抜き)やキャリアアップへの欲求がある。そうしたキャリアアップニーズをしっかりとキャッチして応えているのが「東京ワーキングママ大学」。潜在的にくすぶるニーズに具体的なソリューションを提示することで、もっと欲を持っていい、上を目指していいという勇気を与えています。

ワーキングマザーの支援には、顕在化している物理的ニーズに加え、より深く捉えた精神的ニーズへの対応も重要であることが分かります。

■ワーキングマザーの5段階欲求

- ① 時間の有効活用
- ② 緊急時対応
- ③ コミュニティー
- ④ 自分時間の充実(息抜き)
- ⑤ キャリアアップ

駅の優位性を最も発揮できるターゲット

「東京ワーキングママ大学」の大洲さんが言うように、ワーキングマザーは「動線上に物やサービスを置かないと手を出さない」。そんなシビアな時間の有効活用ニーズに対して、駅の立地は何よりも価値があります。駅商業施設の早朝営業や動線上で営業する夕食準備に特化した臨時売店など、具体的な要望もありました。流山市の「駅前送迎保育ステーション」は、まさに駅という立地が共働き子育て世帯を引き付けた好例です。

また、駅は多くのワーキングマザーが行き交う場であり、地域のハブともなる場所。「育休後カフェ」のようなコミュニティニーズに対応する場の提供や、AsMamaの「子育てシェア」のような子育て支援活動と連携した交

流イベントの開催などにも大きな期待があります。

もちろん、仕事からも子育てからも解放されたニュートラルな場である駅は、自分時間の充実(息抜き)ニーズにも応えられるでしょう。さらに、例えば利便性の高い駅でのキャリアアップセミナーの実施や、駅商業施設でのワーキングマザーのためのファッション提案などで、キャリアアップニーズに対応していくこともできます。

生活動線上をサービスの必須条件とするワーキングマザーは、駅が持つ優位性を最も発揮できるターゲットとして、注目すべき層です。しかも、時間の有効活用などワーキングマザーにフォーカスしたサービスは、他の属性のニーズにも十分応えられるものです。

子育て支援は地域活性の起点となり得る

ワーキングマザーが持つニーズの多様性が見えてきた一方で、ワーキングマザー支援の取り組みが、実はさまざまな社会問題解決の糸口になることも見えてきました。流山市の事例は、共働き子育て世帯の支援によって地域の価値を高め、高齢者が中心だった人口構成を改善。歳入の増加や子どもをきっかけとする地域コミュニティの育成などを目指し、さらには、地域への愛着を高めて、子ども世代も含めた将来にわたる定着率の向上まで視野に入れています。

「子育てシェア」の事例では、ITを活用して地域で頼り合う子育ての仕組みをつくり、地域コミュニティを復活させています。頼る人・頼られる人の両者に精神的・経済的豊かさや安心感を与え、地域を活性化。エリアとしての魅力を高めるとともに、将来的には子育て支援にとどまらず、高齢者介護も含めた、あらゆる場面で共助できる社会づくりへと発展する可能性を秘めています。

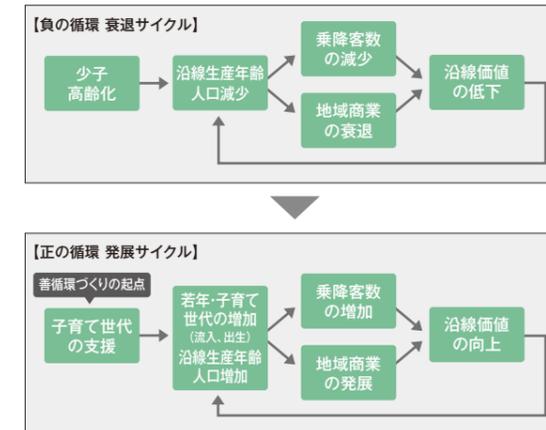
地域の活性化は、インフラを担い、地域と共に生きる鉄道会社にとっても大きな課題です。少子高齢化によって沿線の生産年齢人口が減少すれば、乗降客数の減少や地域商業の衰退を招きます。それは、沿線価値を

低下させることとなり、よりいっそうの人口減少につながっていくという衰退サイクルをつくり出してしまいます。この負の循環を止め、正の循環へスイッチさせるためのヒントが、流山市の子育て支援やAsMamaの「子育てシェア」の事例のようなワーキングマザー支援にあるのではないのでしょうか。AsMamaはすでに鉄道会社との提携を行っており、共助のあるコミュニティを提供することによって沿線価値向上を目指しているといいます。

ワーキングマザーが働きやすい環境を整えることは、当然のことながら、生産年齢人口の減少に対する労働力確保や、長時間労働を見直すことにつながります。そして、地域の活性化や地域コミュニティの復活、さらには高齢者問題の解決にまで広がる大きなポテンシャルを持っています。地域や社会に豊かさを呼び込む鍵は、ワーキングマザー支援にあるといえるのではないのでしょうか。

ただし、結果が見えるまでには時間がかかります。流山市の河尻さんが「将来を見据えて、先行投資で子育て世帯の転入に力を入れている」と言うように、結果を急がず長期的な視点での取り組みが求められるでしょう。

■子育て支援によるサイクルの転換



ラボ女子たちが集まって夜を夜を妄想いたします。

山本貴代の妄想CAMP

VOL.2

「とっておきの駅弁」を考える

妄想キャンプへ、ようこそ！ここでは、毎回、ラボ女子が集まって、1つのテーマにあれこれ果てしない妄想を繰り広げます。第2回目のお題は、「とっておきの駅弁」。さてさて、旅好き女子たちから、どんな妄想駅弁が飛び出すでしょうか。駅弁関係の方、必見！

妄想隊長
山本貴代

今回の妄想キャンパー



ピコ 37歳

食品会社勤務。フードスペシャリスト、栄養教諭の顔も持つ。食欲・性欲・睡眠欲の3大欲を愛す。夢は家庭科塾開校。



ユカ 40歳

食器好きが高じ、外資系の老舗食器ブランドに勤務。社長室でPR、カタログ作りとなんでもこなす。老後の楽しみはカフェ経営。



ナシ子 43歳

15年間美容学校で広報を務める。最近は、テキーラをいろいろ飲むテキーラダイエット法を体得し、なんと4キロ減!!



トミー 31歳

外資系コーヒー会社で商品開発を手がける。趣味は、自転車でのコーヒー屋巡り。最近はお弁当作りにはまっている。

駅弁の記憶は旅の思い出と一体化していました。

駅弁の思い出話から始まった妄想キャンプ。多く出たのはダントツ「峠の釜めし」でした。器は、絶対使わない、しかも重いのに、必ず持って帰ったという話。我が家にも食器棚の上のほうにありましたっけ。「持ち帰った器をおまますごで使いました」(ナシ子)。これは、2度記憶に残ります。「マンガで読んでいたので、食べる前のドキドキ感、食べた後の達成感がありました」(ピコ)。次に多かったのは、山形の「牛肉とまん中」。「列車でお



「列車でお

じさんたちが盛り上がっていたの聞き、思わず買ってしまいました」(ユカ)。「新幹線で初めて食べました。その駅ならではの特別感がありました」(トミー)。土地の名物は強いですね。その他には、列車の窓脇に置いて飲んだ緑茶。プラスチックの容器とその香りまで覚えていたり。シュウマイの醤油入れもみんな大好きでした。

愛がぎゅっしり、こだわりのTPO。未来へ繋がる駅弁。

宿題で考えてきてもらった「とっておきの駅弁」の絵には、中味へのこだわりはもちろんですが、食べるシーンや、お弁当にこもった愛情が描かれていたことに、頷きながらも驚かされました。「今、大人になった家族と一緒に田舎に行くときに食べたい。ご当地のおばあちゃんが方言で、車内に売りに

来て、とれたて野菜やご当地グッズなども一緒に売っている。グッズは旅の後も家族で使えば絆が深まる」というトミーの発表には、みな感動。ほのぼのとした絵の中に、過去から未来へ繋がっていく今だけじゃない駅弁の姿を感じたのでした。「家を出てから帰るまで全部が旅だから、その間ずっとワクワク感を大事にしたい。駅に、『いつでもらっしゃいコーナー』と『おかえりなさいコーナー』があってそこで駅弁を買えるといい。ツアーに組み込まれていてチケットで引取りができるとスムー



ズ」というピコのアイデアもいただきです。駅弁で旅の余韻を感じたい気持ち、帰りにコンビニには寄りたくない気持ち、わかります。



欲張り女子の妄想駅弁対決!! 母への愛VS彼への愛

様々な意見が出た後、2チームに分かれ、「さらなるとっておきの駅弁」を考えて発表。「母を喜ばせる最高のシャバン駅弁」は、ご当地のパン駅弁があったらいいというもの。ピクニック用のバスケット、アミューズは陶器やグラスに入れて見た目も楽しい。思い出になる入れ物は、駅で一時回収後、自宅に持ち帰ることができる。売り子はフランスカイトリアのイケメン職人で記念写真もバッチリ。母の喜ぶ顔がみたいというもの。

もう1チームは、「愛を感じる弁当LOVEN」。作り手の愛と、彼女から彼氏へなど贈り手の愛を感じることができるもの。駅と地域が密着していて、生産者がわかる野菜や名物が詰まっている。もちろん方言で手売り。レシピつきだから、帰ってから思い出を復元できる。アフターオーダーもできる仕組み。彼の好きなものを事前にオーダーカスタマイズ可能。男女用のお箸とステキ柄の風呂敷はお土産にもなる。などなど、どちらのチームも、愛情ぎゅっしり、思い出までびっしりの妄想駅弁が出来上がりました。



とっておきの駅弁の「とっておき」とは?

「作り手から食べる人へ、伝えたいストーリーがある。土地の文化が詰まった芸術品」(トミー)という意見はごもとも。量産の時代だからこそ、ひとつひとつ、作り手の想いまでいただきたいと皆感じるようでした。旅という時

間が普段よりそういう気持ちにさせるのでしょうか。「思い出に残る、誰かが喜んでくれる。喜んでくれたことを後から思い出せること」(ユカ)。「開けた瞬間のサプライズ」(ピコ)。「結局は金額じゃなくて思い出」(ナシ子)。やはり、驚きと思い出は駅弁のキーワードのようです。

目指すは、10年先まで思い出せる記憶に残る駅弁。

旅という非日常でいただくお弁当は、中身もさることながら、それを包む物語が大事なものでした。「極論、まずくてもいい」(ピコ)という意見は言いえて妙。彼女たちの細部に渡る妄想から、この先の駅弁の可能性が見えてきました。かつての駅弁風景にあった地元の人との交流や素朴な手づくり感などからヒントを得ることもありそう。ずっと先まで思い出せてエピソードぎゅっしり、旅の思い出の一部になる駅弁。アイデアと愛が溢れるそんな未来の駅弁が、駅でオーダーメイドできたら、旅がもっと楽しくなりそう!

山本貴代 やまもとたかよ

女性生活アナリスト。女の欲望ラボ、マダムラボ、ダンディラボの3集団を率いる。専門は、女性の意識行動研究、富裕層研究など。独自のメール文通法により20代~70代までの本音を探り続ける。著書に、「女子と出産」(日本経済新聞出版社)「晩娘という生き方」(プレジデント社)など多数。

